

1	名古屋	八熊小学校	マツノ ユウジロウ 名前 松野雄仁郎
分科会番号	12	分科会名	自治的諸活動と生活指導(小学校)

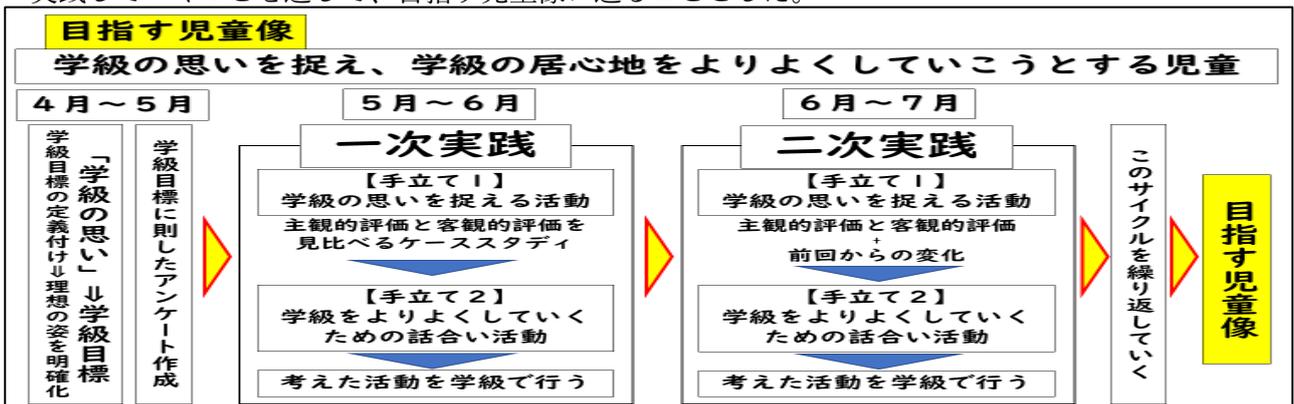
研究題目

学級の思いを捉え、学級の居心地をよりよくしていこうとする児童の育成

研究要項

1 研究のねらい

私は、学級の思いを捉え、学級の居心地をよりよくしていこうとする児童を育てたい。私の考える学級の思いを捉えるとは、他者の様々な考え方を認め、理解するということである。学級の居心地をよりよくしていこうとする児童を育成することは、学級で生活するみんながストレスなく生活できる場所にし、誰もが自分のよさを発揮できる環境を作っていくことにつながると考える。「ナゴヤ学びのコンパス」では実現したい市民の姿が、「『自由』な社会を実現するためには、誰もが対等で、互いの存在を認め合いながら生きていくことが大切です」と示されている。本研究は、その点においても意義があると思う。本学級の児童（6年生23人）は、友達に対して、係活動の遊びや学級レクを積極的に企画する活動的な面が見られ、学級をよりよくしていこうとする素地がある。しかし、その活動は「自分が好きなものをやる」というような自分を中心とした考えのものが主であった。活動のきっかけが学級の友達の思いをくんでいないため、活動を企画した児童は「もっと楽しんでもらえると思った」と意図していたものとは違う結果になっているような気がした。「理想主義的であり、一面的で独断的な傾向になりやすく、相手に批判的になったり自分の価値観に固執しがちになったりする」（小学校学習指導要領解説 特別活動編より引用）小学生の実態を踏まえれば当たり前なことなのかもしれないが、他者の様々な考え方を認め、理解する「学級の思い」を捉えることができれば、この学級の居心地をよりよくしていこうという姿勢は飛躍していくのではないかと考えた。その際に学級の思いを漠然とした形ではなく、学級のみんながより納得した形で共有できるものにしたと考え、学級目標を「24人25脚」とした。ここには「学級の思い」が反映されていた。この学級目標を達成するには、理想の姿を達成していくことが重要だという共通認識も確認した。この学級目標を達成していく過程を本研究の軸にしたいと考えた。今後の社会を生きていく中で、客観的な視野をもち、他者の考えを理解していくことは非常に重要なことだと考える。そこで、本研究では、学級の思いを捉えられるような環境を整え、その上で学級全体の居心地のよさを改善していくような活動を話し合い、実践していくことを通して、目指す児童像に迫ることとした。



【実践の構造図】

## 2 研究の手立て

### 【手立て1】 学級の思いを捉える活動

アンケートの結果をグラフで視覚化することによって、学級目標の達成度を知るだけでなく、学級の友達がどのように考えているのか、また、自分はどのように見られているのかを考える。自分が感じていることとの差に着目したり、学級全体の考えの総意を知ったりすることで学級の思いを捉えやすくすることができるようにする。

### 【手立て2】 学級をよりよくしていくための話し合い活動

手立て1の学級の思いを捉える活動をした後に、学級目標達成に向けてどのような活動をしていけば、学級をよりよくしていくことができるのかという話し合いを行う。そして、学級で検討して決まったその活動を実行していく。一定期間活動を行った後に、再びアンケートを行い、その結果を【手立て1】の活動で再検討していく。【手立て1】→【手立て2】→【手立て1】…というサイクルを繰り返していく。

## 3 一次実践の様子

### (1) 学級の思いを捉える活動

本学級の学級目標は「24人25脚」である。「笑顔」「メリハリ」「協力」「誰とでも」というキーワードから派生した「困っている友達がいたら声を掛ける」や「人によって態度を変えずに行動する」などの8の理想の姿を達成したとき、同時に、この学級目標が達成されることを学級の全員が共通の認識としている。学級目標の達成度を測るために、その理想の姿を設問とした「24人25脚アンケート」(以下アンケート)を作成した。アンケートでは各設問に対して、「自分がどれだけ達成しているか」という主観的な評価(以下【自分】)と「自分以外のクラスの友達がどれだけ達成しているか」という客観的な評価(以下【クラス】)という2観点で点数を付けて達成度を測るようにした。二つの観点があることで、このアンケートの結果には「学級の思い」がより反映されると考えた。児童にとって、主観と客観の評価に差がある状況というのが、どのような状態なのかを考える経験はほとんどないと思った。この実践の中心となるこの違いについて、あらかじめ考えておくことが非常に重要だと考え、ケーススタディとして、【自分】と【クラス】の評価に差がある場合の状況を考えた。普段とは違い、頭を抱えながらもグループでずれれを考える姿が印象的であった。【自分】の評価が【クラス】の評価を上回っている場合は、「自分ができていると思っても周りからできてないと思われていたら勘違いしているだけなのかも」や、【クラス】の評価が【自分】の評価を上回っている場合は「自分ができていると自信をもつための方法が必要かもしれない」などの意見が児童から出てきた。評価の差があると仮定した場合を十分に学級で検討することができたように思う。

24人25脚アンケート			
名前 ( )			
◇学級目標で掲げた理想のクラスに近づくためのアンケートです。「自分」と「クラス」の両方に0-10で点数をつけましょう。			
		点数	点数をつけた理由
笑顔	人が笑顔になるようなことをしていますか	自分	
		クラス	
	クラスで楽しく過ごせていますか	自分	
		クラス	
メリハリ	時間を守って行動できていますか	自分	
		クラス	
	その場に応じたやるべき行動ができていますか	自分	
		クラス	
協力	困っている友達がいたら声をかけていますか	自分	
		クラス	
	友達と力を合わせて活動することができますか	自分	
		クラス	
誰とでも	人によって態度を変えることなく行動できているか	自分	
		クラス	
	誰とグループを組んでも活動できますか	自分	
		クラス	

### 【24人25脚アンケート】

Q:学級で「みんな」と仲良く過ごせていますか?

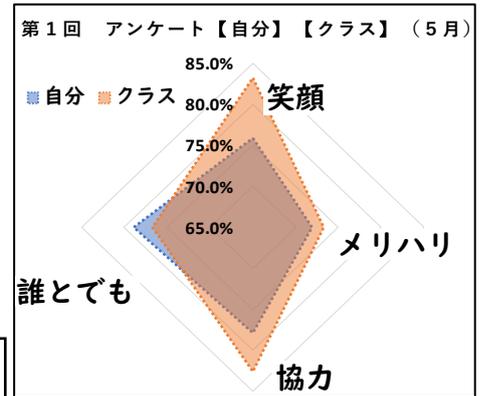


Q:学級で「みんな」と仲良く過ごせていますか?

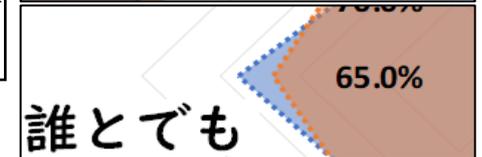
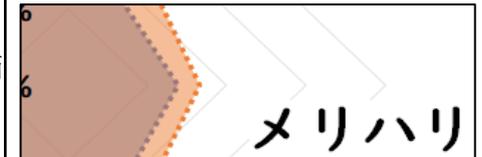


### 【ケーススタディのスライドの一部】

その後、実際に自分の学級のアンケート結果を比較したグラフを児童に提示した。(なお、児童に提示するグラフは児童に分かりやすいよう達成度の最大値を編集している。以下、二次実践でも同じ。) 児童が注目したのは、【自分】と【クラス】の評価に大きく差があった「笑顔」「協力」の項目ではなく、評価に差があまりない「誰とでも」と「メリハリ」だった。グラフをもとに児童は次のような話し合いを行った。



【第1回アンケートの結果】



【グラフの中で児童が注目した部分】

- C1: 「誰とでも」の項目は自分ができていると思っているだけで、周りからはできていないと思われるというずれがある。
- C2: できていると自分が勘違いしているだけなのかもしれない。
- C3: 反対に、「メリハリ」の項目は、【自分】と【クラス】の評価が近い。自分たちと周りから見た感じが一致しているんだ。
- C4: それなら、達成度の低い「メリハリ」に対して何か活動を考えてみると効果が高そう。

ケーススタディの効果が話し合いにしっかりと生かされグラフに表れた学級の思いを感じながら、児童は話し合いができていた。

## (2) 学級をよりよくしていくための話し合い活動

学級の思いを捉える活動をした後に、学級目標達成に向けてどのような活動をしていけば、学級をよりよくしていくことができるのかという話し合いを行った。周りからできていないと思われる「誰とでも」の項目を強化する活動と、最も【自分】と【クラス】の評価が近く正しく現状を捉えられていると考える「メリハリ」の項目についての活動をする事が決まった。

- C1: 「誰とでも」の項目を上げるために、学級の全員と話せる機会があるといいね。
- C2: メリハリは【自分】も【クラス】も評価が低いから、両方を伸ばせる取り組みがいいと思う。
- C3: 休み時間と授業の切り替えができていない人が多い気がする。「メリハリ」が低いのはそれが原因なのではないかな?
- C4: 授業中に盛り上がってうるさくなったときに、なかなか静かにならないという不満もあると思うよ。そこについても考えていった方がいいと思う。

話し合いを経て、学級では、「誰とでも」と「メリハリ」の項目を強化するための活動が三つ考案された。以下がその活動の説明である。

### ① 「誰とでもしりとりタイム」

活動: 朝の会で、毎日違う友達と1分間しりとりを行う。

目的: 話すきっかけを作ることで交流を深め、誰とでも一緒に活動できるようにする。

### ② 「日直ミニゲーム」

活動: 一日一回、日直が考えた1~2分程度のゲームを授業開始前に行う。

目的: 休み時間の余韻が抜けず、授業開始と同時に「メリハリ」をつけて授業を始めることができていないという課題から、授業前にゲームを行い、切り替えて授業に臨めるようにする。

### ③ 「めいそうタイム」

活動: 担任の合図で、1分間全員が目を閉じて瞑想をする。

目的: 授業中に気分を落ち着かせて、授業にメリハリをつけて臨めるようにする。



【誰とでもしりとりタイムの様子】



【日直ミニゲームの様子】



【めいそうタイムの様子】

学級の思いを踏まえて話し合いが行われた結果、どの活動も取り組む理由が明確であり、実践の成果が感じられた。児童によって考案された三つの活動は学級で実際に行われた。三つの活動を約1か月継続し、再びアンケートを実施した。

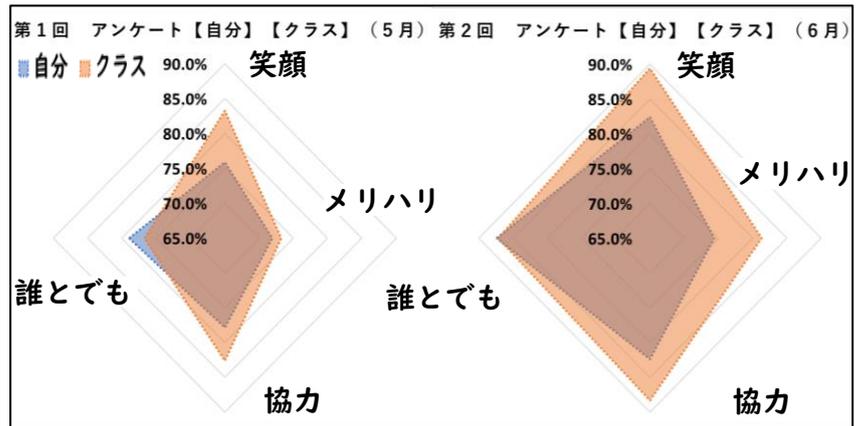
### (3) 一次実践の成果○と課題●

- 【自分】の項目に前回10点を付けていたが、2回目は点数を下げた児童がいた。客観的な評価を意識して取り組んだ結果、自分の主観的な評価を見直すきっかけになっていた。
- アンケートの結果から自分なりの仮説を立てて、活動を考えることができていた。
- ケーススタディで学習した以上の深い話し合いができていなかった。
- 【自分】の方が高かった「笑顔」や「協力」の項目に対しての議論がなかった。

## 4 二次実践の様子

### (1) 学級の思いを捉える活動

児童の考案した三つの活動を約1か月行い、その後取ったアンケートの結果と前回の結果を表したグラフが右図である。1か月の活動の成果や課題がしっかりと反映されたものとなっていた。ここにも、「学級の思い」がつままっていると感じた。今回の話し合いでは、今回取ったアンケートの結果だけでなく、前回の結果との比較ができるようになる。前回に比べ、学級の思いを捉えるための材料がより多くなり、その部分を児童が実感できれば、より効果のある話し合いができると考えた。一次実践で、グラフを見て話し合う活動を経験している児童は、提示したアンケートの結果を見て、すぐに学級の思いを捉える話し合いを始めた。



【左:第1回アンケート結果 右:第2回アンケート結果】

- C1 : 全体的に【自分】も【クラス】も達成度が上がっているね。
- C2 : 「誰とでも」の項目は前回と比べて、【自分】と【クラス】の達成度が同じくらいになったね。
- C3 : 「誰とでもしりとりタイム」の効果があったんじゃない?
- C4 : 「笑顔」「協力」「メリハリ」は、【自分】の評価を【クラス】の評価が大きく上回っているね。
- C5 : みんな自分はできていないと感じているのかな?
- C6 : 「メリハリ」の項目は、二つの活動をして特に取り組んできたのに、【自分】の評価があまり上がっていないね。

児童は、全体的に達成度が上がっていることにうれしさを感じながらも、しっかりと各項目の変化や差に注目して学級の思いを捉える話し合いをすることができていた。

(2) 学級をよりよくしていくための話し合い活動

グラフで学級の思いを確認した後に、今まで行ってきた活動について「活動振り返りカード」を使ってグループごとに振り返りを行った。グループは、前回のアンケートの結果を分析し、アンケートの結果ごとに分類した児童を同じグループにした。学級に対して同じような思いをもった児童が話し合った方が、一つの意見に偏らずに、グループごとに様々な考え方を反映させた意見がまとめやすいと考えたからである。実際に活動の振り返りを各グループで発表した際には、どの活動でもグループによって「とても効果があった」から「効果なし」まで大きく意見が割れた。「日直ミニゲーム」について例を挙げると、効果があったと振り返ったグループは「ゲームの後にいつもより授業に集中して取り組めたから」や「ゲームをしているときに今まであまり話したことの無い人とも交流することができた」といった理由を挙げていた。しかし、効果がないと振り返ったグループは、グラフの推移から「あまり『メリハリ』の達成度が上がっていないから」や「盛り上がったまま、終わってしまうからメリハリをつけて授業に入れない」といった理由を挙げていた。児童はなぜ意見が割れたのかを考えた。以下がその話し合いの様子である。

1 班

### 活動振り返りカード

「メリハリ」を向上させるための『日直ミニゲーム』

とても効果があった 効果あった どちらとも言えない あまり効果なし 効果なし

理由 **クラス** そんなにしべたがたにも話し合いが(主)の人のか 話し合いの結果が

「メリハリ」を向上させるための『めいそうタイム』

とても効果があった 効果あった (どちらとも言えない) あまり効果なし 効果なし

理由 めいそうタイムのほかにしべたり目をかけたりする人がいるから。

「誰とでも」を向上させるための『誰とでもしりとりタイム』

とても効果があった (効果あった) どちらとも言えない あまり効果なし 効果なし

理由 しりとりをぶつけていたらあまるので、月に1回しかしりとりゲームをやるともって変えたいと思う!

【活動振り返りカード】

		1		2		3		4		
		増減	点数	増減	点数	増減	点数	増減	点数	
笑顔	人が笑顔になるようなことをしていますか	自分	-1	8	3	10	-1	6	-2	7
	クラス	0	10	0	10	0	10	0	10	
	自分	0	10	0	10	0	10	0	10	
メリハリ	クラスで楽しく過ごせていますか	自分	3	9	-1	8	-5	5	0	8
	クラス	1	9	1	10	-3	7	1	7	
	自分	2	8	0	9	2	7	0	9	
協力	時間を守って行動できていますか	自分	2	10	1	10	-1	7	1	9
	クラス	2	10	1	10	-1	7	1	9	
	自分	2	10	0	10	-5	5	0	9	
誰とでも	困っている友達がいいたときに声をかけていますか	自分	2	10	1	10	-3	7	-1	7
	クラス	0	10	0	10	1	9	0	10	
	自分	2	10	0	10	0	9	0	10	
誰とでも	人によって態度を変えることができていますか	自分	2	10	1	10	1	9	2	8
	クラス	0	10	0	10	1	10	0	7	
	自分	0	10	0	10	0	10	0	7	
増減		75		77		60		69		
クラス		77		80		67		67		

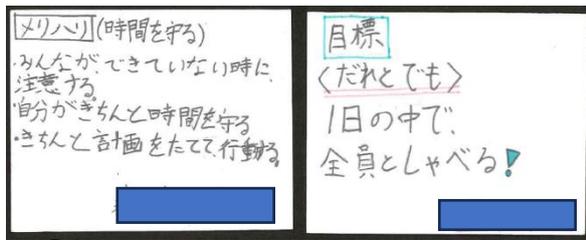
全体的に点数が上がった児童	全体的に点数が上がった児童	全体的に点数が上がった児童
10点から点数を低くした項目がある児童	全体的に点数が低い児童	【クラス】より【自分】が特に低い児童

【アンケートの集計表(上)とそこからグループ分けした児童の話し合いの配置(下)】

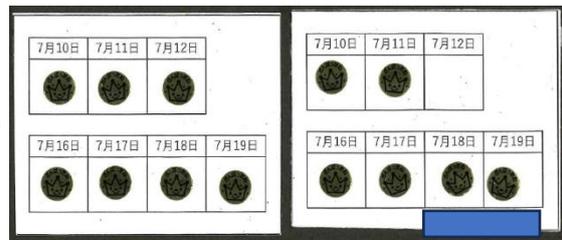
- C1: 「日直ミニゲーム」は楽しく取り組んでいるけど、その楽しさを引きずってしまう子がいて、「メリハリ」のアップにつながっていなかったと思う。
- C2: 「日直ミニゲーム」は「笑顔」と「協力」のアップにはすごくつながったと思う。
- C3: 「めいそうタイム」は「メリハリ」アップにとっても効果があったから、「日直ミニゲーム」と「めいそうタイム」をくっつければ「日直ミニゲーム」は「メリハリ」アップにつながると思う。
- C4: 全体的に【クラス】の評価が上がったけど、【自分】の評価がそれぞれに対して低いのが気になる。
- C5: 個人で目標を考えて、【自分】の評価が上がる取り組みが必要だと思います。

活動の振り返りの話し合いを経て、学級で以下のような活動に取り組んでいくことが決まった。

- ① 「誰とでもゲームタイム」  
活動: 「誰とでもしりとりタイム」で行っていたしりとりを簡単なゲームに変更する。  
目的: しりとりは、話す話題がなくても行えるという利点があったが、より交流を深めるために簡単なゲームを行い、「誰とでも」をアップさせるようにする。
- ② 「日直ミニゲーム+めいそうタイム」  
活動: 「日直ミニゲーム」の直後に「めいそうタイム」を行う。  
目的: 「日直ミニゲーム」後に盛り上がったまま、結局授業に落ち着いて取り組めていないので、「めいそうタイム」を直後に導入することで、今までより効果のある活動にする。
- ③ 「目標カードで目標の振り返り」  
活動: 自分ができていないと思うアンケートの項目に対して目標を立て、帰りの会で振り返る。  
目的: 自分ができていないと思うアンケート項目をアップできるようにする。



【自分ができていないと感じる項目に対して目標を立てた『目標カード』】

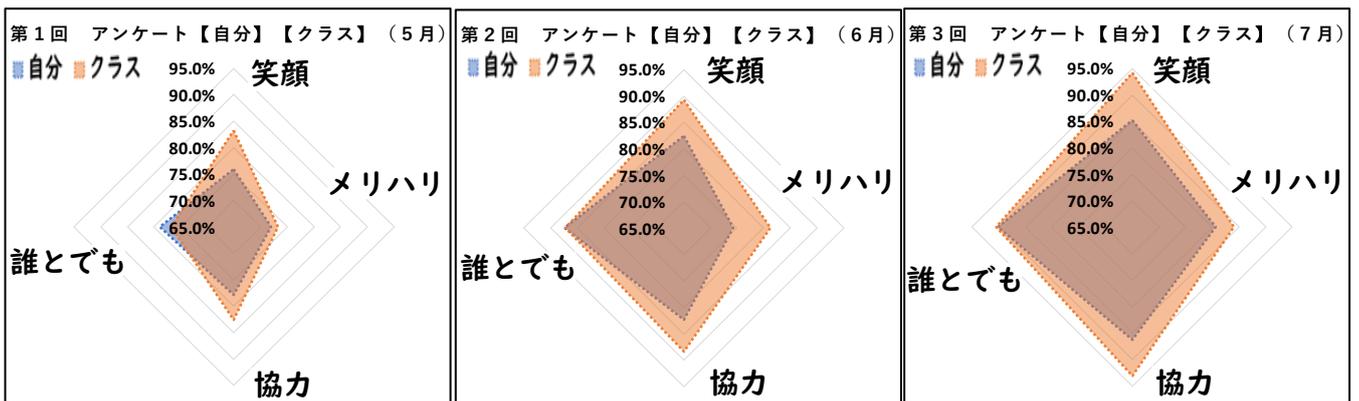


【一日ごとに振り返りをして、達成できていたらシールを貼って成果を可視化する】

(3) 二次実践の成果○と課題●

- 全ての項目で【自分】より【クラス】の達成度が高かったところから、児童が個人の意識を向上させていくために「目標カード」の取り組みを考案できた。主観的評価を上げるための活動に目を向けることができた。
- 現状の活動から効果があった部分と課題の部分をしっかり検討し、児童の中でより有効であると考えられる活動を考えることができた。
- 活動内容が適切なものになっているかを考えるために、活動内容の精選・工夫が必要である。
- 全体感での話し合いになっており、児童一人一人の思いを想像しながら話し合う様子があまり見られなかった。

5 おわりに



【左:第1回アンケート結果 中:第2回アンケート結果 右:第3回アンケート結果】

上に示したのが、二次実践を踏まえた第3回アンケートの結果と、今までのアンケートの結果の推移である。児童が試行錯誤しながら、学級で話し合いに取り組んできた内容が十分に表れていると私は感じる。普段の係活動でも、活動が終わった後に、友達に企画した活動の感想を聞き、次の活動に生かす様子が見られるようになってきた。学級の思いを捉えようとする意識は学級に根付いてきていると感じる。今後は、児童がより細かい「学級の思い」を分析していけるようにしたいと考えている。具体的にはアンケートで児童が記入している「点数を付けた理由」の部分を取って実践をしていきたい。児童のアンケートの記述の一部を見ると、「困っている友達がいても無視してしまうし、他の友達も無視している」という記述や、自分が友達からダメージを受けているというものがあった。非常に切実な「学級の思い」が表れていると感じた。今後も本実践を継続していき、学級の思いを捉え、学級の居心地をよりよくしていこうとする児童を育てていきたい。

困っている友達がいたときに声をかけていますか	自分	6	<u>むしろしてしまふ。</u>
	クラス	5	<u>むしろしていき。</u>
クラスで楽しく過ごせていますか	自分	4	<u>人からダメージ</u>
	クラス	8	みんな笑顔(お礼)だから

【児童のアンケートの記述の一部】